

# 玉屑と『御湯の御影』

富田志津子

はじめに

栗の本玉屑は、播磨の俳壇、栗の本一門の二世宗匠である。活動範囲は広く、二条家俳諧（作し）の宗匠になり、いったん中断していた二条家俳諧の再興に力を尽くした。また、東北から九州まで旅をしており、門葉は各地に広がっている。刊行した俳書も数多く、彼の盛んな活動をすべて把握するのは困難である。

私は、玉屑について、様々な角度からとりあげてきたが、いまだに年譜すら作成できていない。しかし、興味深い俳書のいくつかに焦点をあてて、玉屑の俳諧活動を論じてきた。たとえば、二条家に献上していた『春の光』『秋の錦』（寛政期〜文化文政期）、東北旅行の紀行文『景遊阿都満珂比』（寛政十二）についての論考がそれである。（作と）

今回も、その一連の研究に続くもので、玉屑編の俳書をとり上げる。書名は『御湯の御影』である。「しまねのみゆ」という語が同書中にあるので（後述）、「みゆのみかけ」と読むのであろう。

—

『御湯の御影』は、天理大学附属天理図書館綿屋文庫蔵、私の知る限り、孤本である。（同図書館のマイクロフィルムで閲覧した）。半紙本一冊、外題は「御湯の御影」（題簽中央）、内題なし。序は、「文化三年丙寅秋七月 栗のもと 玉屑」。跋なし。刊記は「蕉門俳諧書林 京三条通寺町西 菊舎太兵衛」。

まず、玉屑の序文とそれに続く本文冒頭部をあげる。（翻刻に際して、旧字体は現行のものに改め、濁点・句読点を付した。以下同じ）

御湯御影集之序

千早振御湯の神のもります因幡なる岩井の御湯は、古くより其名四方に聞えて、から歌大和歌のしらべあなるものから、堀川の院の御歌合の中にも何某のあそのひでたる御歌ども聞えけるより近ごろ

おほ君の御歌所の御かたゝをも、御歌ども御筆して下し給へば、末々の世までもいとめでたく、その御筆の命もながく、世に伝へむ事をこゝの友人誰かれがねぎけるものから、共にこゝろを合せて其後へにも語、人の花をめで鳥をあはれむほ句どもをうち加へて、この集の光を添、御湯の御影と名付て、梓にのぼしこゝに浴みせむ人々にもしらせまほしと、世に披露する事とはなりぬ

文化三年丙寅秋七月

栗のもと玉屑

島根乃御湯をよめる

夜とゝもに下にたく火はなけれども　しま根の御湯はさむるともなし

藤原顕仲朝臣

世々をへてしまねの御湯は今もなを　さむる時なくわきかへるらし

日野前大納言資矩卿

因幡国巨濃郡に温泉あり、

もとは島根の御湯といふ、

今は岩井の御湯といふとかや。

所の旧名によりて歌よめとあつらへられて

いかなればたく火の影も見へざるに　しまねの御湯はわきていつらむ

柴山前権中納言持豊卿

因幡国の島根の御湯をよめる

むかしよりさむるともなきこの国の 島根の御湯や神のまもれる

柴山宮内太輔国豊卿

しるしあればわかかへるごと行かへり 島根のみゆへつどふもろ人

富小路正三位貞直卿

いつの世のいつわき初て尽ぬ世の 島根の御湯のむかしとはゞや

荒尾礼就

玉屑の序文は、因幡の岩井の湯の紹介である。それに続く和歌は、公家らが「島根の御湯」（しまねのみゆ）を詠んでいる。玉屑の序文を要約すると、以下のようである。

岩井の湯は古くから有名で、漢詩や和歌にも詠まれてきた。堀河（『御湯の御影』では「堀川」）院の歌合でも詠まれている。今の和歌所の歌人たちも、自ら筆を執って歌を詠んでくれた。それを後世に伝えたいと、この地の人たちがねがい、また、友人たちが、発句を詠み加えてくれたので、一集にし『御湯の御影』と名付けて刊行し、世の中に披露することにした。温泉の客をはじめとする世の人々に知ってほしいと思う。

つまり、古くから和歌に詠まれてきた岩井の湯を、当地の人の要請で、後世に伝える書を編したのである。序文に続いて、公家たちの和歌が並ぶ。

まず、藤原顕仲の和歌が掲げられているが、源顕仲の間違いである。二人とも平安時代の同時期の歌人で、名前が同じであるためよく混同される。源顕仲は神祇伯。待賢門院堀河の父で、保延四年没、七五歳。堀河天皇の歌壇の中心にいた。この歌は、「島根の湯」を讃えて、火を焚かなくても冷めることがない湯である、と詠む。

序文で「堀川の院の御歌合」とされているが、堀河百首ではなく、永久百首「出湯」の項に「神祇伯 顕仲」の和歌として出る。永久百首は「堀河院後度百首」とも呼ばれ、堀河百首とは対の歌合とされている。そして、この歌が『夫木和歌抄』にも「しまねのみゆ 未国」としてとられている。江戸時代には「しまねの湯」を詠んだ和歌として知られていたようである。しかし、それがどの国にあるのかは、「未国」として特定していない。

玉屑は、この古歌を岩井の湯を詠んだ和歌とした。そして、これをもととして、当代の歌人に引き継いで同題で詠んでもらった。それが、掲出した五首の「島根の湯」の当代和歌である。「もとは島根の御湯といふ、今は岩井の御湯といふとかや。所の旧名によりて歌よめとあつらへられて」と、柴山前権中納言持豊の詞書にあるように、岩井の湯の古名を島根の湯として、古い名で詠むことを、玉屑は要請したのである。

日野資矩以下の歌人は、当時の和歌所の歌人ということだが、富小路貞直までの四人が堂上歌人である。日野資矩は、大納言従一位、天保元年没、七五歳。当時の歌壇の中心であった。柴(芝)山持豊は正二位権大納言、文化十二年没、七四歳。和歌では多くの門人を育て、歌学書の著述も多い。本居宣長と交流をもつなど、地下歌人に対しても理解が深かった。国豊はその養子、正三位宮内大輔中宮少進、文政四年没、四一歳。やはり当代の有名歌人であった。富小路正三位貞直は、玉屑と交流の深かった堂上歌人、天保八年没、七七歳。「如泥」の俳号で、玉屑の刊行する俳書に発句が出ることもあるし、序跋を書くことも多かった。最後の荒尾礼就は鳥取の歌人と思われる。荒尾氏は、鳥取藩の家老を務める家格である。身分が高くても地元（住）の歌人であるから、当地の出で湯の和歌を詠んでもらうのは、難しいことではなかっただろう。

日野資矩の和歌は、源顕仲の和歌を受けて、年を経ても今なお、しま根の湯は冷めることなく沸き返る、と詠む。芝山持豊は、どうして湯が湧き出するのかと問う。芝山国豊は冷めることのない島根の湯は神が守っているのかとし、富小路貞直は、湯に集う人々を詠む。荒尾礼就はいつ湧き出たのか、歴史を知りたい、とする。どれも湯を讃える和歌であるが、とくに特徴はなく、通り一遍の詠みぶりである。玉屑に依頼され、おそらく見たことのない出で湯を、あるいは古歌に拠り、あるいは想像して、型どおりに詠んだのであろう。

富小路貞直と日野資矩は、享和二年冬、「大恩歌合」と呼ばれる、堂上と地下の歌人が交わった歌合に参加して、きびしく処罰されている。すなわち宮廷和歌に出詠する権利を奪われ、師匠からは破門された。とりわけ、歌壇の中

心にいた日野資矩にはきびしく、勅点差留、議奏のお役御免となった。富小路貞直も師から破門されている。二人は、「島根の御湯」を詠んだ時、すでに和歌所から追放されていたはずである。この頃から、急速に玉屑と富小路貞直は親しくなっている（前述、注3）。芝山持豊父子は、大愚歌合には参加していないが、前述のように、地下歌人に理解のあった堂上歌人であった。ようするに地元の荒尾氏以外は、京の和歌世界におさまりきらない堂上歌人たちであり、日野氏と富小路氏は堂上歌壇から失脚している。玉屑は、富小路貞直とのつながりを通して、そのような歌人たちに、島根の湯の和歌を詠んで欲しいと依頼したのである。失脚した歌人といっても、地方の人達にとつては、まさに雲の上の人であったにちがいない。この人たちの詠んだ和歌は、とくに特徴のない、凡庸なものであるが、和歌の詠みぶりは問題ではなく、当代の堂上歌人が当地の出で湯を詠んでいることが重要なのである。

## 二

『御湯の御影』には、前掲の序文と和歌に続いて、以下のような玉屑の文章が出る。

### 御湯の神社に詣る言葉

諸の国に温泉あなる事あげてかぞふるに違あらず。そが中に鳥がなく吾妻にては伊豆国何がしの湯、箱根の湯、信濃にては詠方浅間の湯あるは上毛の草津こは其湯源をしらず、高さ三丈ばかり幅五六間湯勢滝の如く漲り落る也。そを湯坪〜に算もて分ち取、是になきいで湯也。馬のつめ筑紫にては肥後の栃木、肥前の嬉野、薩摩の霧島の湯、あるは豊後の別府こは海中にありて朝夕の潮干のひま〜に浴ミする也。其ゆあみする人、砂を掘、身を砂中に埋め、その俣時長て、傍に清湯あるにて身を濯ぎ常の湯に入が如くするなり。其外、所々の国々にあまたありといへども、紀伊の熊野、摂津の有馬よき人もおさ〜しのび給ひて、詩に歌に古くより其名聞えける。近比、あるものしれる人の温泉の効をあげつろひける中に、但馬城崎の湯を最上とせり。尤宜くこゝろミ分たり。おのれ上ミにいふ所の温泉にゆあみせざるはあらじ、こゝの因幡なる岩井の御湯は、中〜に城崎の上ミにたつとも有らまほしかば、抑此御湯の往古をたづぬるに、山城国八十宇治人の中に藤原の冬久となんいへる人、故あ

りて此地に來り、家富家の子榮へて、めでたくくらしけるより孤を恤ミ貧きを救ふ。其志しいと優く時の人宇治の長者と呼。今の宇治村の傍に長者台といふ平かなる岡あり。是冬久の屋鋪あとなりとぞ。或時、冬久身に瘡を發る事ありていたくなやみけるが、偶巷外に出て神を祈るに独の神女忽然と顯れ、其客儀たゞならず、冬久あやしみ居けるに、娘のいへらく、汝、病にくるしむ事なかれ、とつき筈をもて石の面を丁々と敲きける。其声に隨て温泉方十尺ばかり涌出たり。是に浴ミせよとあるに、則浴ミす。三日を待ずして瘡悉く癒たり。其名を問むとするに、雲の消るが如く、失けるとぞ。是大己貴の御子少彦名の御業ならんと禮拜歡喜して、悦びかぎりなし。見奉りし神客と藥師の尊像とを自刻ミテ温泉の北とひんがしとに崇め祭る。今の御湯の神社東源寺、是なり。此時より爰に家居をなす者いできにけり。年ありて 清和の帝の御時、勅して堂社を造り改めさせぬると、然るに元亨の間、平の高時 王室も燬が如くするより、かの長者子孫も温泉も此時に滅びたりと。其後寛永の初に及んで 光仲公此國を領じ給ひし比、復温泉進るを以、国主大に歡び、再び御湯の神垣を清くし、東源寺を作り改め、温泉をおこしけるとぞ。夫より今に至まで、時々太守修覆を加へさせ給へば、永く諸人の悦となれり。是またく御湯の神のおほん徳を恵ませ醫王仏の薬を施し給へる由縁なるべしと、いやまひ奉りて文化三ツにあたる年の秋、爰の友人蒲川ぬしがあなひをもとめて、御湯の神本宮に額突奉りぬ

神風や世々にいはるの御湯の秋

栗本 玉屑

春秋の岩井は温泉の花盛

京 月居

花ははな月は月／＼宵藥師

分三 雨人

御湯の氣やあした夕の霧深ミ

、 桂舟

御湯清しいづこの菊の流なる

ハカカ 鴛少

久しくなやめる事ありて、

こゝの温泉に浴し病またく

いえぬる歡喜にぬかづき奉りて

惠ありや瑠璃の庭踏花見堂

出出 桃如

涼しさも御湯の恵ぞ吾も人も

遊行阿 珠阿

玉屑は、この文章において、まず日本の名湯を列挙し、「こゝの因幡なる岩井の御湯は中〜に城崎の上ミにたつとも有らまほし」と述べる。城崎温泉よりも上等な湯だ、と褒めているのである。そして、岩井の湯の縁起を記す。すなわち、宇治の藤原冬久がここに来て屋敷を構えた。皮膚病を患った時、神女が顕れて、杖で石を割ると温泉が噴き出し、それに浴すると皮膚病が治癒したという。これによって温泉が開かれ、神仏を祀って温泉の北と東に御湯神社と東源寺が建立された。鎌倉時代にいったん廃れ、江戸時代になって鳥取藩主、池田満仲（寛永七〜元禄六）により再興された。

多少私が補って説明したが、これが岩井の湯の縁起である。前掲の序文から続けて読むと、「島根の湯」を詠んだ古歌、それに因んだ当代堂上の和歌、さらに温泉の縁起という順番で書き留めている。縁起で温泉の由緒を述べ、堂上の和歌をもって現在の出で湯を讃えているのである。

それにしても、因幡の生まれでもなく、おそらく当地で生活したことのない玉屑が、このような縁起を知ったのは何に拠ったのであろうか。

『御湯の御影』に載る縁起とほぼ同じ文章が、阿部恭庵によって編纂され寛政七年に完成した『因幡志』に収められている。同書には、冒頭の源頭仲の永久百首の和歌も載っている。そこでは「島根の湯」として、岩井の湯が紹介されているのである。

江戸時代中期から藩撰あるいは私撰の地誌の編纂がさかんになった。『因幡志』もそのひとつである。全三十七巻の写本で、玉屑が同書を見ることができたという確証はないが、玉屑が書き留めた温泉の由来が、当地の伝承として存在していたことは確認できる。玉屑は『因幡誌』あるいは同様の何らかの地誌を参照して、この温泉の縁起を記したのである。

玉屑は、温泉と寺と神社の縁起を記した後、「御湯の神本宮に額突奉りぬ」として「神風や世々にいはるの御湯の秋」と詠んでいる。彼自身、当地を訪れ、神社に詣でて、句を詠んでいるのである。それに続くのは、当代の俳人の発句である。月居は、二条家俳諧を再興した人、この頃は京に住んでいた。鶯少は月居の周辺の人（二条家俳諧で月

居宗匠の時に役人を務めた。播磨の雨人・桂舟、但馬の桃如は、玉屑の門人である。桃如は岩井の湯で病が癒えたとする。東北の遊行柳の珠阿の句もある。これらの俳人たちは、あたかも当地に来て出で湯につきり、神社を詣でたかのようなのである。しかし、現実には当地を訪れたとは限らない。

温泉の由緒を述べ、縁起を語り、堂上貴族の和歌を並べ、当代俳人の発句も並べる。これは、岩井の湯の名所案内(名所記)といえるだろう。名所記は、旅が盛んになった江戸時代に、各地のものが作られていたのであった。しかし、播磨の宗匠、玉屑にとつて、因幡の岩井の湯の名所案内を作ることとは、どういう意味があったのだろうか。

前掲の玉屑らの発句のあとには、「四季混雑」として発句・連句が並ぶ。そのうち、この近辺の俳人は「鳥取社中」十人、「宮下」二人、「浦富」五人、「岩井」十人である。これらの人たちは、新たに玉屑門人として栗の本一門に入った人々であったと思われる。そのあとには、播磨・但馬、筑紫などの人々の句が続き、皆、栗の本門である。つまり、玉屑は、播磨や但馬の俳壇のほかに、新たに因幡を俳壇開拓し、岩井温泉の人々を門下においた。その新たな門人たちのために、この俳書を出版したのである。序文で「この友人誰かれがねぎけるものから」とあるように、当地の要請があって、地域振興の一助となる書を編集したのであろう。俳諧が地域産業の振興に一役かっているのである。さらに、「岩井十勝」として十景に対しそれぞれ岩井の人達が句を詠んでいる。以下のようなのである。

岩井十勝

神社古松

神風の幾年涼し松の声

蒲川

湯川流螢

居ほどの螢は来たり湯の流れ 如竹

大野落鷹

雨の宵鷹も大野に落る声

雨鷄

重山暮雪

月雪も爰につもるや重山

五粒

瑞応秋月

寺の月秋一ぱいの山の色

鳥城

藤森夜雨

花藤や森の燈深き秋の雨

文魚

恩志夕照

あかねさす夕／＼や里の秋

禹川

坂上青嵐

青あらしわけて坂上の朝朝

青條

東源晚鐘

春の日や暮るも遅き寺の鐘

桑田

長者台花

花年／＼台は其世の春の色

玉屑

近江八景の「八景」に二つを加えた「岩井十勝」。その景をそれぞれ句に詠む、玉屑以外の九人の俳人は、皆、岩井の人である。すでに俳諧の実力をもつこれらの人々が、玉屑の門下に入ったのであろう。当地の名所の十景の紹介と有力俳人の紹介を兼ねて「岩井十勝」の句が詠まれた。岩井の風景を讃え、俳人を讃えている、といつてよい。さらに、『御湯の御影』の最後は、跋文のかわりに、玉屑の「島回之記」で結ばれている。次にあげる。

島回之記

無夜庵玉屑

因幡国浦富てふ浦は、此国の北のきはみにして、海の面渺々と眼にさはる国なく、偶秋天の朗なる日は隠岐国幽に雲のくゞまるが如く見わたされ、海は天に連りて、行帆帰る帆の気色も、飛鳥の雲に入かと疑ふばかり。高麗唐土の浪よする海岳にして、秋のあはれ猶更に心をとゞむる山水の奇観なり。かくて、此浦半を守ます大神社オホノなる宮島にとりて

島松に汐霧立て秋寒し

さまゞの島あるが中に烏帽子島とて、よき人のゑぼしさうそこしています如なる嶋あり。そこをめぐれば、菜種島高く聳て人の力の及ざるが、松のひまゞに菜種のおのづから年々生茂りて、弥生の半に鳥の渡来てむらがり埒す、よて名とす

あら磯や早渡り鴨に汐烟る

みぎり左に島々めぐり立て、名を並るに違あらず。そが中に鬼島はおそろしく、鵜島はやさしく観音島大同二年とか、海よりぼさちの爰にあがらせ給ひしとぞ。其御仏、今は何某の寺の本尊とす。其西のかた千貫松といふひと木の松ある島あり。自然の天工たとへるに煩ひなし。かの天台の石橋、あるは鴈門もかゝる風情ならん。高さ凡三丈長さ百丈ばかり、門の幅三四間、門の内高さ水の上凡壹丈二三尺、中に舟を入るにさはりなし。其舟の行抜る所甘間あまりと覚ゆ。此洞の中、燕の巢くふて、舟漕入れば幾干となくこぼれ出る也。此松海の西に卓机を置て其上にのせたるが如く、水無月の末と二度花さくは、其種のこぼれゞて年に二度の盛ならん。其盛なる比は、海にうつりて浪にこがねをなすものから、いろくづも恐れて近づかざると也。此島の真中、抜通りて舟の通ひ自由なり。かゝるよしは肥後のたばこ島、出雲の大根島、是皆天より種をこぼし給ふなるべし。しかはあれど、大根島は今人住ていやしくなれり。こゝの菜種島は中ゞに北海のあらゞしき中に山花のやさしく咲出るは奇とも妙ともいふべし

露霜のいつ種植て菜種島

舟を汀によすれば、加賀どの河原とて平かなる磯あり。こはそのかみ池田加賀守爰の領主たりし時なり、ところをしつらひ□(ヤブレ)し所とぞ。その傍に鴨が磯とて飛ゞに島あり。かの此島もとより土砂なければ、草木外になし。いつの世の雨露の恵をうけて、根ざし葉茂りて干とせの色をかへざる松の屈曲こと葉にも筆にも尽しがたし

秋いく安芸松の價ぞあはれなる

文化三丙寅秋八月

玉屑は、浦富海岸を舟で巡った。文章中、烏帽子島、菜種島、鬼島、観音島などの島を廻り、また名松をめでのいる。浦富の風景をつぶさに語って、当地の素晴らしさを、この文章を読む人々に知らしめる。自らの発句も三句入れている。

この俳諧紀行文を読んでまず念頭に浮かぶのは『奥の細道』である。「自然の天工」「松の屈曲」など、『奥の細道』を思わせる言葉が頻出する。玉屑は、あたかも芭蕉を思わせる紀行文で自ら周遊して観たものを述べて『御湯の御影』を締めくくっているのである。

温泉の由緒を語り、堂上歌人の和歌をあげ、当代俳人がそこを訪れ句を詠む。十景が土地の俳人に詠まれ、『奥の細道』のような俳諧紀行文も入る。これは、栗の本の俳諧撰集であり、かつ俳諧紀行であり、かつ岩井の湯の名所案内である。

終わりに

栗の本の俳諧撰集『御湯の御影』は、多様な記事を載せた、地方の案内、ガイドブックである。当時の地誌の編集や名所記刊行の流行が、俳諧宗匠をしてこのような俳諧名所記を作らせたともいえる。由緒ある温泉にふさわしく、平安時代に詠まれた和歌を掲出し、当代和歌所の堂上歌人の詠を掲出する。地方の人々にとって、都の貴族は雲上の人々であり、やはり貴いものであった。

俳諧では、玉屑自身が出で湯を訪れ、浦富の海を廻って、文章を綴り、句を詠んでいる。また月居を登場させ、当地を詠じた発句を出す。月居と玉屑、それは当時二条家俳諧再興を成し遂げた二人の大宗匠であった。全国でも有名な俳人が二人ここに来て、出で湯につきり、発句を詠んだ、とすれば瞠目すべきことである。

玉屑は、新たに門人になった当地の人々のために、このような俳書を編集した。これは岩井の湯のガイドブックである。玉屑らしい地域振興策であり、あらたな門人となった人々への玉屑の貢献であった。玉屑の俳壇拡張策であったともいえる。

堂上の雅と地方の俳諧を結びつけることができたのは、歌人と交流をもち、二条家俳諧宗匠であった玉屑ならではの

のことであった。これにより、岩井温泉の振興が成功したかどうかは知らない。今も、岩井の出で湯と温泉街はのこっている。

(注) 1、富田志津子『二条家俳諧』和泉書院刊、1999年

2、「二条家俳諧と玉屑」『近世文芸』九八、2013年7月・「玉屑の旅」『俳文学報』四八、2014年11月

3、富田志津子「玉屑と如泥」大阪俳文学研究会『会報』四六、2012年10月

4、盛田帝子「享和期京都歌壇の一側面」『近世文芸』六二、1995年6月

# Gyokusetsu and “Miyu no Mikage”

Shizuko TOMITA

Kurinomoto-Gyokusetsu was a haikumaster in the middle Yedo period. He influenced a literary society in Kansai region. He also occupied the position of the Nijoke-Haikai master. He acted vigorously. He increased his followers as he made a journey and published Haishos.

This paper discusses a book Gyokusetsu edited and published.

Gyokusetsu wrote “Miyu no Mikage” when he visited a spa in Tottori. The book was classified as his Haikai Note, a travel journal, and a guidebook for the region. Gyokusetsu edited the book for the new followers in Tottori. In other words, he wrote this book to invigorate the local communities in Tottori. That was the strategy to expand his influence. This paper elucidates his trip and Haidan management by reading his book.